

「わかりあう」

鳥取県 大安寺 住職 松尾 昭倫

十年程前のことです。祖母が足の手術を受けるため、介護施設から総合病院へ転院しました。手術の翌日、私が見舞いに行きますと、6人部屋の入り口近くに祖母のベッドがありました。枕元で祖母と話をしていると、おやつプリンが配られました。

祖母は認知症でもあり、介護施設では食事の介助も受けていましたので、今日は、私がプリンを食べさせようと、スプーンで祖母の口元へ向けました。しかし、祖母は口を結んで食べようとはしません。周りを見渡すと、祖母のベッドはカーテンの仕切りをしていないため、他の患者さんからまるみえです。そのような場所でプリンを食べさせて貰うのが恥ずかしく思え、祖母は私の介助を断ったのだと思いました。

実は、この日初めて私は祖母の食事を介助したのです。祖母は、私の両親が共働きであったため、物心ついたときから、ずっと私の側にいてくれました。私が風邪などで寝込むと、片栗粉を代用したくず湯やお粥、熱の高い時には、缶詰のみかんやすり下ろしたリンゴをひと匙ずつ口に入れてくれた事を、思い出しました。私はその頃の思い出を話すと、祖母は「そうだったね」と頷いてくれます。「昔はおばあちゃんが、僕に食べさせてくれたんだから、今度は僕が食べさせてあげる番」と言いながらプリンを口元にもっていくと、すんなり食べてくれました。

それからは、夕食の時間帯に見舞うと、祖母は私の介助で食べてくれるようになりました。「忙しいから、わざわざ来てくれなくてもいいのに」と口癖のように言っていました。しだいに「ありがとう」と言ってくれるようになりました。食事の介助をするようになってから、何か別の気持ちで祖母と心が通じ合ったように感じました。

六年前に祖母は他界しましたが、家族のような間柄でも、介護や介助には互いによくわかり合うことが大切だと教えられました。